

aceae). Smithsonian Contributions to Botany 51: 1-102.

\* \* \* \*

コゴメギク *Galinsoga parviflora* とダリア *Dahlia pinnata* の種子形成を研究した。共にメナモミ連に属し、前者はハキダメギク亜連 subtrib. Galinsoginae に、後者はダリア亜連 subtrib. Coreopsidinae に属する。Robinson (1981) の研究では subtrib. Coreopsidinae のものは、種子の表皮の細胞は膜が薄く特に肥厚することはないが、subtrib. Galinsoginae ものは細胞膜の一部が肥厚して模様を作るという。本研究のものも同じ結果を示した。また両種とも種皮の下皮層と繊維層との間に phytomelanin の層がある。これは今まで原始的な群にみられる性質と考えられていたが、最近の研究では逆に進化した性質と考えられるようになった。

□木原 均・篠遠喜人・磯野直秀(編)：近代日本生物学者小伝 567 pp. 1989. 平河出版社，東京．¥4,500. 74名の執筆者(故人13名)が1名ずつの著名な生物学者の小伝(各3-6頁)を担当したもの。主として「採集と飼育」「遺伝」に発表されたものを再編しているが、書き下ろし15篇もある。これらの「小伝篇」のほか、頭初に木村陽二郎(2篇)，上野益三，内田亨(各1篇)の明治・大正通史(国立科学博物館，1977)の「通史篇」がある。専門分野の異なる先覚者の一生には、初めて知って驚くような記事もあり、啓発されることが多かった。本書の編集・レイアウトは極めてスマートで、小伝に採り上げられた生物学者の小型の肖像写真・小年譜とともに自然に記事に誘いこまれる。篠遠は「まえがき」で、正伝ではなく、あくまでも小伝であると特にことわっている。磯野は先駆者および後継者たちの事蹟が個々には不分明のことが多いのを嘆いて、本書を編したという。小伝の著者たちの記述の仕方はさまざまであるが、本書によって日本の生物学の流れの大筋を汲みとられたという。できれば年表を付けて、全体の統一を図りたかったともいう。しかし、篠遠の多年にわたる意図はほぼ達成されたかに見える。本書を入手した夜は興に引かれて、読書は深更に及んだ。

(津山 尚)

□矢野 亮：街の自然観察 200 pp. 1989. 筑摩書房，東京．¥950. べつにわざわざ山や海に行かないでも、すぐ身近なところで自然を見つけたり遊んだりすることができるということを、たくさんの事例で示したもの。国立科学博物館自然教育園勤務の著者だけあって、動植物のいろいろな見方が紹介されている。

(金井弘夫)